京都の文化と生物多様性

知って、一緒に、未来へつなごう！

第1章 京都市の生物多様性とその保全について
「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」認定企業・団体の取組

第2章 和の花を育てる 6
エイザンカタバミ,カノコソウ,タムラソウ

京都市
CITY OF KYOTO

京都市では,生物多様性保全の取組を進めています!

詳しくは,京都市生物多様性プラン
～生きもの・文化豊かな京都を未来へ～
をご覧ください。

→わたしたちの生活は,**生物多様性の恵み**に支えられていることをご存知ですか?
→**生物多様性の恵み**である京都市の資源を活用した生活や経済活動を行いましょう!

平成31年3月発行　京都市印刷物第303263号
発行：京都市環境政策局環境企画部環境管理課

制作：第1章　京都市環境政策局環境企画部環境管理課
制作協力
京都水族館／日新電機株式会社／株式会社松栄堂／株式会社島津製作所／株式会社洛西ガーデン・松尾学区自治連合会／洛西ニュータウン創生推進連絡会小畑川活用検討チーム／NPO法人KES環境機構

第2章　公益財団法人京都市都市緑化協会
『和の花を育てる 6』取材協力（五十音順）
<団体>梅小路公園園芸セルフケア教室/京都絞り工芸館/京都市立開睛小中学校/NPO法人国境なき環境協働ネットワーク/武田薬品京都薬用植物園/八坂神社
<個人>秦賢二さん（園芸家）/藤井肇さん（大原野森林公園・森の案内人）

京都市
CITY OF KYOTO
京都市はSDGsを支援しています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
2030年に向けて
世界が合意した
「持続可能な開発目標」です

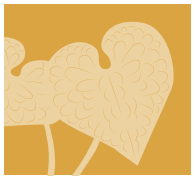
この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ!

知って,一緒に,未来へつなごう!

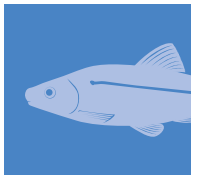
京都の文化と生物多様性

ハグロトンボ

アサギマダラ



フタバアオイ



イチモンジタナゴ

ツバメ

チマキザサ

フジバカマ

モリアオガエル

目 次 | Contents

第1章 _ 京都市の生物多様性とその保全について

「生物多様性」って何のこと? ―― 2

生物多様性の恵みに育まれた京都の文化
生物多様性の保全＝暮らしと伝統を守ること ―― 3

京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度 ―― 4

認定企業・団体の取組

- 京都水族館 ―― 6
- 日新電機株式会社 ―― 8
- 株式会社 松栄堂 ―― 10
- 株式会社 島津製作所 ―― 12
- 株式会社 洛西ガーデン／松尾学区自治連合会 ―― 14
- 洛西ニュータウン創生推進連絡会小畑川活用検討チーム ―― 16
- NPO法人KES環境機構 ―― 18

第2章 _ 和の花を育てる 6

和の花を育てる 6 ―― 20

エイザンカタバミ ―― 22

カノコソウ ―― 26

比叡山フィールドワーク ―― 30

タムラソウ ―― 32

和の花保全ネットワーク ―― 36

京都市の生物多様性とその保全について

第1章

京都市生物多様性プラン

▸▸▸「生物多様性」って何のこと?

生物多様性とは,生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。地球上の生きものは,約40億年の長い時間の中で様々な環境に適応して進化し,現在の3,000万種ともいわれる多様な生きものが生まれました。これらの生命は一つ一つに個性があり,また,全ての生きものが直接的・間接的に支え合って生きています。生物多様性条約では,生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性という3つのレベルで多様性があるとしています。

(参考:環境省「生物多様性ウェブサイト」)

生態系の多様性

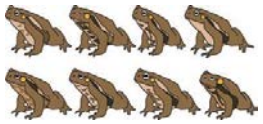
様々なタイプの
自然環境があること
(森林,草原,川,池,沼など)

種の多様性

様々な種類の生きものが
生息・生育していること
(動物,植物,菌類など)

遺伝子の多様性

同じ生きものの種類の中にも,
遺伝子による違いがあること
(形,模様,生態など)



▸▸▸生物多様性の恵みに育まれた京都の文化

京都市は,市街地を取り囲む三山(東山,北山,西山)や三川(鴨川,桂川,宇治川)が織りなす豊かな自然に恵まれています。私たちの暮らしは,様々な生物多様性の恵み(生態系サービス)により支えられて成り立っており,とりわけ京都市の生物多様性は,人々の安全で豊かな暮らしを支えるとともに,食(京料理,京野菜など),祭祀,庭園,茶道,生け花などの様々な伝統文化を育んできました。

生態系サービス

ミレニアム生態系評価※では,供給サービス,調整サービス,文化サービス,基盤サービスの4つに分類されます。

供給サービス

自然が食料,繊維,木材など,私たちの暮らしに供給してくれる恵み

調整サービス

気候の調節や災害の防止,安全で栄養豊かな水の供給などの恵み

文化サービス

自然によってもたらされる心身の安らぎや満足感など,私たちの精神を豊かにしてくれる恵み

基盤サービス

供給サービス・調整サービス・文化サービスを維持するために必要な恵み

※国際連合の提唱によって,世界95カ国の専門家が参加し行われた地球規模の生態系に関する環境アセスメント(2001～2005年)

▸▸▸生物多様性の保全=暮らしと伝統を守ること

京都市の生物多様性は,生きものの生息場所の減少や自然環境の劣化など,様々な課題に直面しています。

そこで,京都市では,京都ならではの自然環境や伝統文化を後世に受け継いでいくため,目指すべき生物多様性保全の方向性を示す**「京都市生物多様性プラン～生きもの・文化豊かな京都を未来へ～」**を平成26(2014)年3月に策定しました。

生物多様性が直面する危機

- 人の手による自然環境の破壊
- 人間活動の縮小による里山の荒廃
- 外来種による生態系のかく乱
- 地球温暖化に伴う環境の変化 など

▸ **生物多様性の恵みの低下** ▸

伝統文化継承の危機

例)
- 葵祭で飾られるフタバアオイ
- 祇園祭の粽(ちまき)に使用するチマキザサ

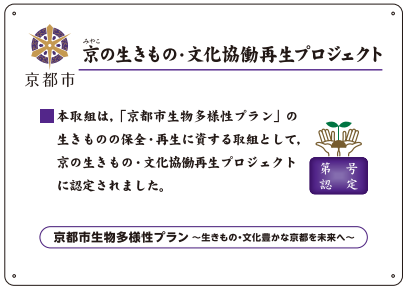
などの固有生物の減少

京都市生物多様性プランの策定

京都の豊かな文化が世代を超えて継承されるように,全ての人が生物多様性の恵みを生活の一部として再認識し,地域資源を生かした持続的な暮らしや経済活動が行われている社会を**「あるべき姿」**とし,様々な取組を進めています。

▸▸▸京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度

京都市では,京都の祭りや文化を支えてきた生きものの保全・再生のための取組を認定し,必要に応じて技術的な支援を行う専門家を派遣する「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度」を平成26(2014)年9月に創設し,京都ならではの自然環境や伝統文化を後世に受け継ぐための取組を推進しています。



認定プレート

これまでに20件のプロジェクトを認定し,221団体・事業所がフタバアオイやチマキザサ,フジバカマをはじめとする生きものの保全・再生に取り組んでいます。

(平成30(2018)年12月末時点)

[認定の流れ]

申　　請

▼

学識経験者の意見を聞き,認定の可否を判定

①「京都市生物多様性プラン」に掲げる施策の方向性「生きものの生息環境を保全します」に合致するとともに,京都の伝統文化を育んできた京都市固有の生態系の保全に資する取組であるか?
②継続性が期待されるか?

▼

認　　定

▼

必要に応じ,専門家を派遣

本冊子では,同プロジェクトに認定された取組を紹介します。
制度について,詳しくは以下のウェブサイトをご覧ください。

https://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/page/0000187608.html

京都の祭りを支える植物

コラム

葵祭とフタバアオイ

京都三大祭りの一つである葵祭では,その名のとおり,行列の装束や牛車にフタバアオイが飾られています。これは,上賀茂神社の祭神が神山に降臨した際,神託に従って葵桂を飾って祭りを行ったことに由来するといわれています。

フタバアオイは,本州・四国・九州の里山に生育する背の低い多年草で,ハート形の葉を2枚ずつ付けることから,このように名付けられました。春には,小さな紫色の花を咲かせます。

葵祭に使用されるフタバアオイの葉は,毎年10,000枚ほど。かつては身近な林で比較的簡単に採集できたそうですが,近年では生育数の減少により,境内に自生するものだけでは必要な枚数が集まらなくなっています。

[葵里帰り]

上賀茂神社では,「葵プロジェクト」※を設立し,小学校を中心とした教育機関や企業・個人と共同でフタバアオイを育成し,伝統祭事「葵祭」を次世代へ継承する取組を進めています。平成27(2015)年度からは,「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度」の認定を受けた企業等が,葵プロジェクトから提供を受けて育てたフタバアオイを,毎年5月に開催される奉納式「葵里帰り」で上賀茂神社に奉納しています。

※平成22(2010)年にNPO法人として設立し,平成30(2018)年度に一般財団法人に移行

祇園祭とチマキザサ

葵祭と同じく,京都三大祭りの一つである祇園祭で,厄除けとして授与される粽の原材料として使われるのがチマキザサです。

チマキザサは,本州・四国・九州の山地の林に生育する大型のササで,ほかのササと違い表面に毛がないのが特徴です。厄除け粽のほか,食品を包んだり乗せたりするのに使われています。京都市内では花脊や八丁平で見ることができましたが,近年,増えすぎたニホンジカの食害により若芽が十分に育たず,絶滅の危機に瀕しています。

フタバアオイ

チマキザサ

京都水族館

京の生きもの・文化協働再生プロジェクト第1号認定

源流から海に至る水のつながりと,多くのいのちが共生する生態系を再現した水族館で,平成24(2012)年に開業。国の特別天然記念物であるオオサショウウオや,東寺をバックにイルカがジャンプするパフォーマンスも人気です。

京都水族館館長
下村実さん

「京の里山」エリア

水族館のコンセプトは「水と共につながる,いのち。」京都の川や海をテーマにしたエリアのほか,水田を中心にした「京の里山」エリアも設けられています。このエリアは,生きものが棚田を利用する環境と,そこに人間も深く関わっていることを知ってほしいと生まれた場所で,メダカなどが泳ぐ小川が流れ,地元の草花や木々が植えられており,京都の里山の風景が屋外に再現されています。

専門家を招いて導入

「京の里山」エリアでは,平成26(2014)年に京都水族館が「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」の第1号に認定されたことを受けて展示を開始したフタバアオイとチマキザサを,説明プレートと一緒に見ることができます。館長の下村さんをはじめ,水生生物の専門家である水族館関係者にとって,これらの植物は専門外。認定制度の専門家派遣を利用し,専門家を招いて植える場所や育成方法などのレクチャーを受け,自生地の視察も行ったそうです。

「京の里山」エリア

説明プレートが付けられたチマキザサ

祭りに使われてきた身近な植物

「フタバアオイもチマキザサも,かつてはもっと身近にあったもの。だからこそ葵祭や祇園祭に使われてきたんです」と下村さんは言います。祭りの多くは,五穀豊穣を祈り,自然に感謝し,また畏怖して加護を願うもの。ところが,そういった自然とのつながりは現在では薄れつつあります。「地元のフタバアオイやチマキザサが使われてきたことを知らない人も多いんです。まずは地域の自然に興味を持ってもらうことで,お互いの関係性が良くなるといいなと考えました」

京都の遺伝子を守る

フタバアオイは,「葵プロジェクト」を通じて上賀茂神社から苗の提供を受けて育成しています。平成26(2014)年の春からは,毎年20〜30株ほど,株分けしたものを「葵里帰り」で葵祭に奉納しています。チマキザサも,祇園祭の粽(ちまき)に使われるチマキザサを伝統的に育ててきた左京区花脊から,チマキザサ再生委員会※を通じて譲り受けました。水族館や動植物園は,万が一,生きものが生息地で絶滅することがあっても遺伝子を残せるようにと,危険分散の役割も担っています。京都水族館でも,京都起源の植物にこだわってこの2種を育成しています。

※京都市左京区花脊自治振興会,別所自治振興会,祇園祭山鉾町有志,チマキザサ再生研究会(京都大学有志),京都市(左京区役所・産業観光局林業振興課)等で構成

将来はワークショップも

これまでも水生生物についてのワークショップは行われてきましたが,水族館という場所柄,植物については稲作を体験するプログラム以外は未開催。「子どもたちは勉強と聞くと興味がなくなるので,水辺の自然をテーマに,楽しみながら学べるワークショップを開催できるとよいかなと考えています」と下村さん。子どもたちに自然を身近に感じてもらえる仕組み作りが,今後の課題です。

葵祭に奉納されるフタバアオイ

お問合せ先
☎075-354-3130(午前10時〜午後6時)
https://www.kyoto-aquarium.com

memo

日新電機株式会社

京の生きもの・文化協働再生プロジェクト第2号・第19号認定

「新設された研修センター」

日新電機は,発電所から送られる電力の損失軽減・電圧調整等を行うコンデンサ等の電力機器を製造する京都の企業です。生物多様性の保全についても盛り込まれている国際規格・ISO14001を導入している同社。近年,太陽光発電システムといったクリーンエネルギー事業にも力を注ぐなど,地球環境に配慮した製品を生み出し続けています。

耐震工事を契機に「京都市生物多様性プラン」に沿った緑地へ

日新電機株式会社
生産技術部
設備グループグループ長
市田雄次さん

日新電機株式会社
生産技術部
設備グループ主任
中野和典さん

本社敷地内の建物の耐震補強工事に合わせ,京都にゆかりのある植物を中心に希少植物を含めた植栽を取り入れた緑地を整備することになりました。フタバアオイ,チマキザサ,ヒオウギ,キクタニギクなど,京都の伝統文化とゆかりの深い希少植物を本社内の緑地で栽培するほか,雨水を水景に活用しながら草花や樹木を育てる庭を持つ研修センターも新設し,その取組は拡大を続けています。

野山の四季をテーマに

101建屋前に咲くカワラナデシコ

社内の環境部門からの提案で,耐震補強が必要な78建屋と101建屋の周囲を「京都市生物多様性プランに沿った緑地」として整備することに決まり,「野山の春夏秋冬」をテーマに公益財団法人京都市都市緑化協会のアドバイスを受けながら植栽が配置されました。「緑を枯らしてはいけないという思いから,1年目は担当部署が人海戦術で朝と夕方に水やりをしたり,夏期連休中は休日出勤をする人や他部署の人にも依頼するなど,協力しながら植物を根付かせていきました」と日新電機・生産技術部設備グループの中野さんは当時の様子を語ります。

フタバアオイの奉納も

78建屋前の緑地

101建屋前の緑地

社内の協力により,「葵プロジェクト」を通じて上賀茂神社から株分けされたフタバアオイは「葵里帰り」で葵祭に奉納できるほどに成長。また,敷地内2箇所に設けられた緑地の植物には,名前とその特徴を記したプレートを設置。絶滅危惧種などの希少植物には,プレートに色付きラベルを加えることで,緑地の前を通る社内外の人々に関心を持ってもらえるような工夫を施しました。

“雨庭”へ希少植物を移植

研修センター前の水景

同社では更なる展開として,“雨庭(あめにわ)”,“水景”を備えた研修センターを平成31(2019)年に完成させました。“雨庭”とは建物の屋根やアスファルトの路面などに降った雨水を一時的に貯留し,ゆっくり地中に浸透させる構造を持った植栽空間を指します。「桂川の生態系」をイメージしたこの庭には,2箇所の緑地で育ったフタバアオイなどを一部移植する予定で,その準備として専門家を招き社員向けの勉強会を開催し,同時に株分けの指導も受けたそうです。

地域に開かれた場所に

今後は完成したばかりの“雨庭”,“水景”に植えられた植栽の整備・定着を図るとともに,研修センター内で,近隣住民に向けた生物多様性に関するイベントや専門家を招いた講義などを計画中だそうです。

研修センターのアプローチ部分に設けられた雨庭

お問合せ先 **生産技術部 設備グループ／☎075-864-8336**(午前9時～午後4時)
http://nissin.jp/

memo

株式会社 松栄堂

京の生きもの・文化協働再生プロジェクト第7号認定

今から300年ほど前に京都で創業し,3代目が本格的にお香づくりを開始。宗教用の薫香をはじめ,茶席用の香木や練香,暮らしに彩りを添える現代的なインセンスに匂い袋まで,香りにまつわる商品を広く展開しています。

株式会社 松栄堂
専務取締役
畑 元章さん

株式会社 松栄堂
経営計画室
チーフマネジャー
井上健司さん

希少植物の保護育成

お香の原料として天然香料を使う松栄堂では,自然に感謝する意味を込めて希少植物の保護育成に取り組んできました。平成13(2001)年に自然保護団体からカリガネソウを預かって育てたのが始まりで,以来,育成する種類は次第に増加。その活動の一部は平成27(2015)年,「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」に認定されました。

フジバカマの店頭公開

店頭で花鉢を展示

フジバカマのお香

プロジェクトでの認定種は,フジバカマ・ヒオウギ・キクタニギク・オミナエシの4種。『源氏物語』に登場したり,祇園祭で厄除けのために飾られるなど,いずれも古くから京都で親しまれてきた植物です。せっかく育てているこれらの植物の存在を広めていきたいと,店頭に鉢を置いて公開するようになったのは平成17(2005)年から。本店前の街路樹スペースに植えたオミナエシを除き,花の季節に合わせて夏はヒオウギ,秋はフジバカマとキクタニギクが,本店と産寧坂店を飾ります。

お客様とのコミュニケーションに

ヒオウギの植物情報カード

祇園祭の時期にヒオウギを置くと「京都の夏の風物詩やなぁ」と声が掛かることも。「季節の花があると,それをきっかけにお客様との会話が弾みます。商品に関わるやりとりだけで終わらない,コミュニケーションツールになっています」と,畑さんと井上さんは話します。また,花の時期には植物情報カードをご来店のお客様に配布。ただ愛でるだけでなく,これらの植物が野生ではどのような危機に瀕しているのかを知らせることにも力を注いでいます。

希少植物のポスターを制作

クリンソウの季刊ポスター

平成27(2015)年からの取組として,京都府のレッドデータブックに掲載され,絶滅が危惧される植物のポスターを季刊で発行。プロジェクトの認定種の中では,これまでにフジバカマとヒオウギを採用しました。ほかにも,クリンソウやフクジュソウ,セツブンソウなどをポスターにして,全国の取引先に配っています。これも,一人でも多くの人の目に留まり,地球環境について考えるきっかけになればという想いからです。

フジバカマのお香を開発

良い香りのする秋の花として,『古今和歌集』にも登場するフジバカマ。観賞しやすいよう夏前に葉を刈り取る必要があり,松栄堂ではその葉を使ったお香と匂い袋を平成22(2010)年に商品化し,毎年秋に販売しています。平成30(2018)年には,フジバカマの花の模様を刺繍した新しい匂い袋の販売も始まりました。香りを楽しむことは,平安時代に貴族の間で花開いた京都伝統の文化。これらの商品には,香りを通じて希少植物の存在を身近に感じてほしいという想いが詰まっています。

フジバカマの匂い袋

お問合せ先
京都本店・薫習館／☎075-212-5590
http://www.shoyeido.co.jp

memo

株式会社 島津製作所

京の生きもの・文化協働再生プロジェクト第13号認定

明治8（1875）年,木屋町二条で理化学器械の製造を開始。外国製品に代わる国産の理科実験器具などを学校に広め,日本の科学教育の発展に貢献しました。現在は,計測機器や医療機器,航空機器などを世界に供給するグローバル企業です。

株式会社 島津製作所
環境経営統括室
岡崎令子さん

株式会社 島津総合サービス
第2事業部課長
市河三啓さん

在来種が植えられた「島津の森」

平成26（2014）年に本社社屋が建て替えられた際,敷地の緑化のために誕生したのが「島津の森」です。京都在来の自然植生をコンセプトに,85種・約1,000本の草木が植えられました。「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト」に認定されたフタバアオイとフジバカマも育てられています。これらの管理を行っているのが,環境経営統括室の岡崎さんも所属するプロジェクトチーム「え～こクラブ」と,植栽などを担当する関連会社の島津総合サービスの市河さんたちの約20名です。

葵祭にフタバアオイを奉納

フタバアオイを育てることになったきっかけは,小学校への環境出前授業を行う「え～こクラブ」が,平成27（2015）年,京都市の「京都環境賞」で企業活動賞を受賞したことでした。ここでご縁があって「葵プロジェクト」を知り,同年から育成を始めています。約100株植えたフタバアオイは順調に成長し,平成29（2017）年の春以降,毎年「葵里帰り」で葵祭に奉納されて京都の初夏を彩っています。

島津の森

葵祭に奉納

フタバアオイの育成地

「島津の森」生垣の植物紹介プレート

フジバカマとアサギマダラ

美しいアサギマダラも飛来

敷地内から平安時代の遺構が出土する同社では,その時代に見られた植物も育てています。フジバカマは『源氏物語』にも登場する京都にゆかりのある花。平成28（2016）年,公益財団法人京都市都市緑化協会から譲り受けた50株を植栽しました。秋には可憐な薄紫色の花が咲き,海を渡って移動する大型の蝶・アサギマダラが蜜を吸いに来ます。平成30（2018）年10月に,京都府の「明治150年京都創成」の協賛事業として行った本社見学会の時にも飛んで来て,来場者を喜ばせたそうです。

生きものが市街地に回帰する森に

「島津の森」は,生物多様性の保全や回復に役立つ取組を評価する,公益財団法人日本生態系協会によるハビタット評価認証（JHEP認証）で最高ランクのAAA評価を取得しています。京都市内には,京都御苑や下鴨神社などに大きな緑地がいくつか点在しますが,同社があるこの地域は元々は空白地帯。野鳥や昆虫が移動する中継地として,ちょうどよい場所でした。メジロやジョウビタキ,アサギマダラやアオスジアゲハといった小鳥や蝶が飛来し,カブトムシも生息しています。生きものが周りの市街地に回帰できるような森に育てることは,「島津の森」の目標の一つです。

地域住民を招くイベントを

親子生きもの探偵団

企業内緑地である「島津の森」が一般公開される機会は多くありませんが,平成29（2017）年8月には,京都市と連携して自然観察会「親子生きもの探偵団」を開催。また,社員を対象に,森を会場にしたコンサートを行ったこともあります。「ノウハウを蓄積して,いずれはイベントに地域の方々を招き,生物多様性保全の活動を社外にも広めていきたいと考えています」と今後の展望を語っていただきました。

お問合せ先
環境経営統括室／☎075-823-1113
https://www.shimadzu.co.jp/

memo

株式会社 洛西ガーデン

京の生きもの・文化協働再生プロジェクト第5号認定

松尾学区自治連合会

京の生きもの・文化協働再生プロジェクト第8号認定

株式会社 洛西ガーデン
代表取締役
永田隆三さん

松尾学区自治連合会
会長
荒木康俊さん

右から,洛西ガーデンの永田さんと松尾学区自治連合会の荒木さん,笹川さん

京都盆地の西部に位置する西山連峰に臨み,桂川が流れる西京区松尾地区は,松尾大社や西芳寺(苔寺)といった由緒ある社寺が点在する地としても知られます。この地域では,造園業を営む洛西ガーデンと地元自治会組織が連携しフタバアオイの栽培が行われています。

松尾大社とフタバアオイ

フタバアオイは,京都の三大祭りの一つに数えられる葵祭に欠かせない植物として有名ですが,松尾大社でも同様に,毎年5月の祭礼でフタバアオイが用いられていることは意外に知られていません。大宝元(701)年創建といわれる松尾大社の神紋は,葵祭の上賀茂・下鴨両神社と同じ,フタバアオイがかたどられています。毎年5月上旬,通称“おかえり”とも呼ばれる「還幸祭(かんこうさい)」が盛大に執り行われる際には,本殿や楼門,神輿から神職の冠・烏帽子に至るまで,多くのフタバアオイとカツラで飾られるのが習わしです。

造園の知識をいかして育成

松尾大社の「還幸祭」で使われるフタバアオイの数は600株以上といい,古くより地元松尾の社家である山下家が西山連峰の山中に自生するものを大社へ納めてきました。それが平成20(2008)年,突然,原因不明の壊滅状態となり,奉納が難しくなったそうです。その話を聞いた,松尾大社の氏子で地元で日本庭園などを手掛ける洛西ガーデンの代表である永田さんが「それやったら栽培しようか」と名乗りを上げ,自社の敷地で育て始めたのが活動のきっかけだといいます。「仕事での経験をいかして,試行錯誤のうえ,赤玉土などをブレンドした培養土を使って育てています」と永田さん。

公園でも栽培を開始

松室やすらぎの庭

公園奥に設けられた栽培スペース

落ち葉を専用器に入れ堆肥に

平成25(2013)年からは,西芳寺(苔寺)に隣接する公園「松室やすらぎの庭」でもフタバアオイの栽培がスタートしました。世話をするのは,松尾の27自治会と17団体で構成される松尾学区自治連合会のメンバーです。「平成28(2016)年に再整備された公園では,落葉樹の落ち葉がゴミとして捨てられていました。そんなとき,松尾大社の還幸祭で使われるフタバアオイが減っていると聞き,それなら公園の落ち葉を堆肥にして育ててみようと思ったんです」と連合会会長・荒木さん。そこで,古くからの知人である永田さんからアドバイスを受けながら,譲り受けた株を植え付け,平成30(2018)年には300株を奉納できるほどになりました。

フタバアオイの株分け

松尾大社に奉納したフタバアオイ

松尾大社にフタバアオイを奉納された皆さん

住民に根付きつつある活動

現在では,地域住民にも呼び掛け,年に4回ほど草引きや植え付け,刈り取りなどの活動を行い,奉納を続けているといいます。「松尾大社にとって大切な植物・フタバアオイを守り育てたい」という想いが,この地域の人々の間に少しずつ広がっているようです。

お問合せ先
☎090-3715-4471(洛西ガーデン 永田さん)
https://rakusai-garden.com/

memo

洛西ニュータウン創生推進連絡会 小畑川活用検討チーム

京の生きもの・文化協働再生プロジェクト第14号認定

洛西ニュータウン創生推進連絡会小畑川活用検討チームの皆さん

万葉集や古今和歌集,源氏物語にも登場し,古くから身近な野草として広く親しまれてきたフジバカマ。今ではめったに見ることができない植物となり,京都府レッドデータブックでは絶滅寸前種に分類されています。洛西ニュータウンでは,近年,このフジバカマを起爆剤に魅力あるまちづくりを進めています。

洛西ニュータウン
創生推進連絡会
小畑川活用検討チーム
リーダー
髙木幸三さん

洛西ニュータウン
創生推進連絡会
小畑川活用検討チーム
副リーダー
久世幸男さん

団地が目指す生物多様性

京都初の大規模住宅団地として昭和47(1972)年に着工した洛西ニュータウン。平成19(2007)年,住民主体のまちづくりを進めるために発足したのが「洛西ニュータウン創生推進連絡会」です。会が掲げる「生物多様性豊かなまちづくり」の一環として,団地内を流れる小畑川の活用を目指す連絡会のメンバー13人が,フジバカマの栽培を始めたのが平成27(2015)年。その結果,小畑川左岸の人通りが増加し,地域の魅力アップにつながっています。

フジバカマの咲く河川敷に

「自宅で1株だけ育てていたフジバカマの花に,きれいなチョウチョが飛んで来たんですよ。その感動が忘れられなくて」と語るのは副リーダー・久世さん。久世さんは,平成20(2008)年の「源氏物語千年紀」を機に展開されたフジバカマの保護育成プロジェクトに参加していました。そこで,地元・洛西ニュータウンが生物多様性を軸としたまちづくりを目指すことになったとき,「生物多様性ならぜひフジバカマを」と提案しました。その久世さんの意見に連絡会のメンバーが賛同。河原を好むというフジバカマと小畑川左岸を活用したい地域の要望も合致し,河川敷での栽培がスタートしました。

洛西ニュータウン内を流れる小畑川

アサギマダラが飛来したフジバカマ

最初の年から大成功

当初は3箇所,100株から始まった野生種のフジバカマの育成は順調に進み,平成27(2015)年の9月下旬には紫がかった白い花が見事に咲き始めました。「最初の年,貴重な渡りの蝶,アサギマダラが花に来たときは大騒ぎでした。今では秋になると,花や蝶を見に来る人々で河川敷はとてもにぎわいます」とリーダーの髙木さんが教えてくれました。

貴族も好んだ香料の一つ

検討チームではフジバカマの多彩な魅力を多くの人に伝えようと,乾燥させた葉や茎を使った香り袋や,薬湯のもと作りなどにも積極的に取り組んでいます。フジバカマは平安時代には香料として用いられていたほか,かつては端午の節句にフジバカマ湯(蘭湯(らんとう))につかる風習があり,これが後の菖蒲湯になったともいわれています。栽培だけに留まらず,フジバカマの活用方法まで掘り下げ,当時の文化を伝えていこうとする活動が続けられています。

フジバカマの香り袋

毎年秋にイベントを開催

平成28(2016)年からは,秋の花の開花時期に合わせて地域内外から参加者を募る観賞会などを定期的に開催。地元小学校の児童へのフジバカマの育て方の指導も2年前からスタートし,その活動の裾野はますます広がっています。

洛西ニュータウン創生推進連絡会
小畑川活用検討チームの皆さん

お問合せ先 ☎075-332-5900(リーダー 髙木さん)

NPO法人KES環境機構

京の生きもの・文化協働再生プロジェクト第3号・第10号・第12号・第16号・第20号認定

NPO法人KES環境機構では，都市の生物多様性確保に貢献するため，「KESエコロジカルネットワークプロジェクト」に取り組んでいます。平成26（2014）年にフジバカマとフタバアオイの生息域外保全活動として18事業所で開始した「KESエコロジカルネットワーク」は，平成30（2018）年までに，育成する希少植物を以下の9種に拡大し，247事業所で取組を行っています。

講習会

第3号認定
フタバアオイ・フジバカマ

第10号認定
ヒオウギ・キクタニギク

第12号認定
オミナエシ・カワラナデシコ

第16号認定
アヤメ・ワレモコウ

第20号認定
クリンソウ

当初は，「点」での取組から京都駅の緑水歩廊と梅小路公園の朱雀の庭を結ぶ「線」の取組への拡大を目指しましたが，現在では京都市域全体をカバーする「面」での活動となりました。

KESエコロジカルネットワークの取組

希少植物の生息域外保全活動講習会を開催し，苗や資材等の引渡しや，専門家による植物の植え付け実習などを行っています。フタバアオイは，参加事業所が殖やした株を「葵里帰り」で葵祭に奉納しています。また，フジバカマやキクタニギクは，梅小路公園「藤袴と和の花展」や，京都駅ビル内の緑化展示施設「緑水歩廊」での展示，自生地だった「菊渓（きくたに）」でのキクタニギク再生のための株の提供につながっています。参加事業所からは，「京都ならではの活動で誇らしい」という声が届いています。

講習会での植え付け実習

葵里帰り

祇園祭エコ屋台村でのヒオウギの展示

KESエコロジカルネットワークプロジェクト
事務局：京のアジェンダ21フォーラム（京都市地球温暖化対策室委託事業），協力団体：公益財団法人京都市都市緑化協会，京都駅ビル開発株式会社，京都市環境管理課

京都駅緑水歩廊でのキクタニギクの展示

藤袴と和の花展でのフジバカマの展示

KES（KES・環境マネジメントシステム・スタンダード）とは・・・

平成13（2001）年から登録を開始した京都発祥の環境マネジメントシステムの規格であり，低コストで取り組みやすく，また，ステップ1とステップ2の2段階のレベルを設定しているため，あらゆる規模や業種の組織（企業や学校など）で導入することができます。

お問合せ先
☎075-342-1170（午前9時～午後5時）
http://www.keskyoto.org/index.html

第2章

和の花を育てる 6

エイザンカタバミ
カノコソウ
タムラソウ

コラム
●比叡山フィールドワーク
●和の花保全ネットワーク

※写真は“京鹿の子絞り”と
“カノコソウ”
写真協力：京都絞り工芸館

制作協力 公益財団法人 京都市都市緑化協会 KYOTO CITY GREENERY ASSOCIATION

第2章は,公益財団法人京都市都市緑化協会（以下,「緑化協会」という。）の監修で制作しました。
本章は,緑化協会が発行した「和の花を育てる1」,京都市が発行した「和の花を育てる2～5」の続編です。

はじめに

かつて京都の暮らしの中で利用され,身近に親しまれてきた植物は,生活様式や都市・森林の環境の変化などで失われつつあります。

「和の花を育てる」シリーズでは,京都ゆかりの植物などについて紹介しています。今回はエイザンカタバミ,カノコソウ,タムラソウの3種を取り上げます。いずれも, 現在では自生種を身近に見掛けることが少なくなった植物です。

また,今回は, 前回取り上げた医師・本草家の山本亡羊（ぼうよう）と公家歌人の千種有功（ちぐさ ありこと）の,「比叡山フィールドワーク」の続編も掲載しています。

これらの和の花は,梅小路公園にある朱雀の庭にて春と秋の年2回開催している「和の花」展示会で順次紹介しています。

【これまでに紹介した植物】
エイザンスミレ,フタバアオイ,オケラ,フジバカマ,キキョウ,ヒオウギ,キクタニギク,ショウジョウバカマ,クリンソウ,オミナエシ,カザグルマ,アヤメ,カワラナデシコ,ノカンゾウ,ホタルブクロ,ワレモコウ（全16種）

植物に接する際のマナー

野生植物を絶滅に追いやる原因の一つは,園芸目的の乱獲といわれています。「美しいから,かわいいから」といって,野山から植物を持ち帰らないようにしましょう。
山野草は,信頼できる山野草店から入手しましょう。

エイザンカタバミ　叡山酢漿草（カタバミ科　多年草）

- 学名：*Oxalis griffithii*
- 分布：本州,四国,九州,中国大陸・ヒマラヤ
- 花期：3～4月
- 京都府RD※1：記載なし
- 環境省RL※2：記載なし

※1レッドデータブック
※2レッドリスト

鉢で育てたエイザンカタバミ
2014年3月12日
緑化協会 円山公園事務所にて

まちの中のカタバミ

まちなかで,アスファルトの隙間に咲く三つ葉のカタバミをよく見掛けます。その多くは,熱帯から温帯に生息し黄色い花が咲くカタバミや, 葉が赤紫色をしたウスアカカタバミです。また,観賞用として海外から渡ってきたムラサキカタバミは,プランターなどで栽培されています。世界に生息するカタバミは,南アフリカや南アメリカを中心に約900種あるといわれています。日本に元々自生するカタバミは6種あり,エゾカタバミ,アマミカタバミ,コミヤマカタバミ,オオヤマカタバミ,ミヤマカタバミなどが知られています。ミヤマカタバミが今回紹介するエイザンカタバミとも呼ばれています。

そのほかにも, まちで見掛ける三つ葉の植物にはクローバーがありますが,こちらはヨーロッパ原産のマメ科の植物でカタバミとは種類が異なり,シロツメクサ,ムラサキツメクサと呼ばれ, 江戸時代頃に日本に帰化したものです。

カタバミ

ウスアカカタバミ

ムラサキカタバミ

比叡山で多く見られるエイザンカタバミ

エイザンカタバミは,山地の木陰に群生し,早春に白い5弁の花を咲かせます。時に薄紫色のものも見られます。エイザンカタバミの名は,比叡山で多く見られたことから付けられたようです。名の初見は,江戸時代に岩崎常正（つねまさ）が著した園芸書『本草図譜（ほんぞうずふ）』にあり,また, 京都の本草家, 山本亡羊の『山城採薬目録（やましろさいやくもくろく）』にも掲載されています。現在の比叡山でも明るい林床や参道で見ることができます。

「家つとに　先そつまゝし　大日枝の　山の名おへる　かたはミの花」

“我が家の手土産に,枝先の花を摘み取ろう。何せこの花はただのかたばみではなく,‘えいざんかたばみ’なのだから”と,江戸後期の公家歌人,千種有功は山本亡羊らと比叡山へ採薬に出かけた際に和歌を詠み残しています。個体数が少なくなった私たちの時代では,持ち帰らずに大切に見守りたいものです。

岩崎常正『本草図譜』写,エイザンカタバミ
江戸後期（国立国会図書館所蔵）
この書では絵図と共に,「花は淡い紅色とし,一種に白花のものもある」と紹介されている。

八重のエイザンカタバミ 園芸品種か?
2018年4月2日
比叡山の麓の園内にて

エイザンカタバミは早春の花で,4月下旬には既に花は見られなかった。
2018年4月30日
比叡山 旧黒谷峠にて

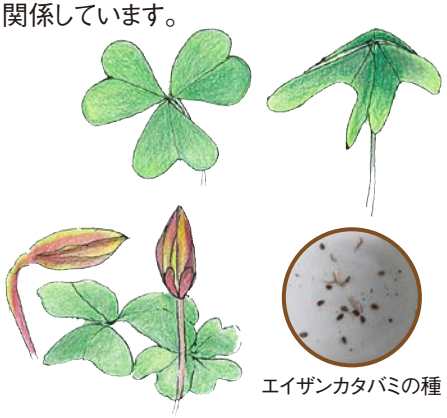
エイザンカタバミの特性

別名の「ミヤマカタバミ」のミヤマは,一般に深山を表しますが,ミヤマカタバミは高山では見られず,低い山に自生しています。

カタバミは漢字で酢漿草と書きます。葉にシュウ酸を含んでおり,葉を噛むと酸っぱい味がすることに由来します。お吸い物などの具にされたり,葉のシュウ酸を使ってさびなどを落としたりすることもあったようです。

就眠運動

花や葉が明るさや温度の変化により周期的に開閉するように動くことを“就眠運動”と呼びます。エイザンカタバミなどに見られる約24時間周期の就眠運動には,あらゆる生物が体内に持っている約24時間周期のリズムである概日リズムが関係しています。



エイザンカタバミの種

◆栽培

【日頃の手入れと水やり】

直射日光を避けた日陰で育てます。乾燥を嫌いますので,水切れには十分注意します。鉢で育てる場合,夏場は鉢の表面に落ち葉などでマルチングしておくと水切れを防げます。11月頃には落葉します。

【用土】

水はけの良い土を使用します。

【殖やし方】

播種と株分けにより殖やすことができます。

【病害虫】

特にありません。

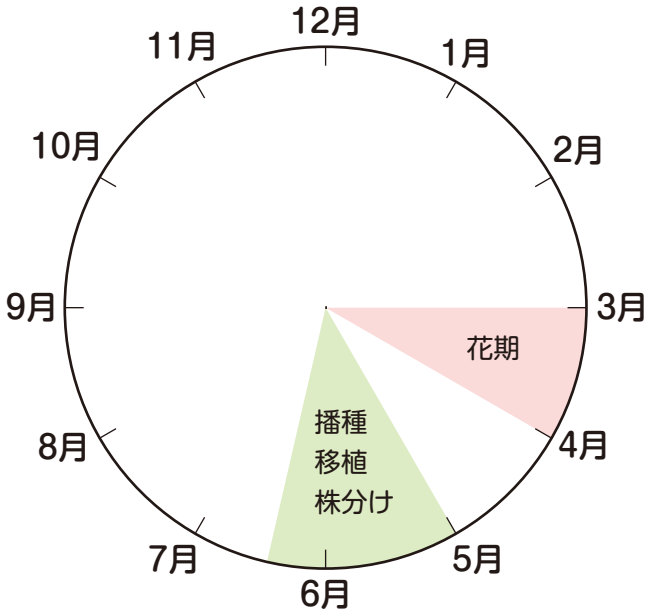
【播種の方法】

鞘がはじける前に採取して採りまきし,土は被せなくても構いません。

閉鎖花

開花して,昆虫や風などの力を借りて受精する花を開放花といいます。一方,閉じたままで自家受精する花を閉鎖花と呼び,劣悪な環境下でも確実に受精するよう進化したとされています。エイザンカタバミは開放花と閉鎖花の両方の性質を持ちます。

栽培スケジュール



かいらしい(かわいらしい)花やなあ。
種から育てても難しいことあらへん

エイザンカタバミ京の口伝

こぼれ種でなんぼでも殖えるわ

カノコソウ　鹿の子草（オミナエシ科　多年草）

- 学名：*Valeriana fauriei*
- 分布：北海道,本州,四国,九州,
  朝鮮半島・中国大陸・樺太
- 花期：5～7月
- 京都府RD：絶滅寸前種
- 環境省RL：記載なし

鹿の子草

名前の頭に“鹿の子”が付けられているものは,鹿の子豆,カノコユリ, 鹿の子絞り,鹿子の木など様々あります。“鹿の子”とは鹿の背中に出る斑点のことをいいます。また,古事記では鹿が神の使いなどおめでたい生きものとして扱われていたことから,縁起物として鹿にちなんだ名が付けられるようになったともいわれます。

カノコソウは, 山地の湿った草原に生息する多年草で,花を上から見ると“鹿の子絞り”に見えることから“鹿の子草”と呼ばれるようになったといわれています。オミナエシによく似た姿であることから“ハルオミナエシ”とも呼ばれます。

鹿の子豆

カノコユリ

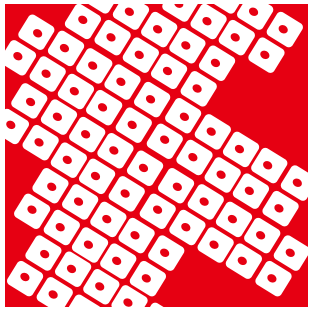
鹿の子絞り

鹿子の木　高木の常緑樹で,樹皮が剥離し,まだら模様になることから名付けられた。

カノコソウの名の由来,“鹿の子絞り”

染物の“鹿の子絞り”は染付模様の技法の名です。日本の絞り染めは, 古くはインドが起源だといわれています。日本書紀には,中国へ日本の絞りの織物を献上したとあります。源氏物語には, “小さきものをくくり染めたる…”とあり, この頃から宮廷で身分の高い者の着物に使われていたようです。

京都では, 絹に絞りを施す“京鹿の子絞り”と呼ばれます。絞りの下絵は,友禅の手法と同様にアオバナを用いて描かれ,絹の布を小さくつまみ上げ,9回糸を括って絞りが作られます。1人の職人が1日掛かりの手作業で300～400粒程度しか絞れず,総絞りの着物では約15万粒を絞り上げる必要があるため, 制作に2年間ほど費やされます。江戸時代中期には高価な絞り染めが庶民の間でも大流行しました。享保12（1727）年には倹約令が出され, 絞りの着用を控えるようお達しが出されるほどだったようです。このような背景から,手間暇の掛かる高価な絞り染めは, 次第に,絞り襦袢や髪飾りなど小物の装飾として控えめに使われるようになっていったそうです。



←絹の布地に敷き詰めて絞る“京鹿の子絞り”の模様は,整地された田に似ていることから“疋田絞り”とも呼ばれる。

左はアオバナ。絞り染めの工程の中でアオバナが使われるのは下絵のみ。
右は“疋田”の下絵付けのための器具。

【参考・写真・聞き取り】
京都絞り工芸館 吉岡信昌氏

カノコソウの特性

鎮静剤としての利用

中国では纈草（けっそう）と呼び民間薬として用いられてきました。日本では根を吉草根（きっそうこん）と呼び漢方薬として古くから使われ，江戸時代頃の蘭学の導入と共に，ヒステリーや神経症の鎮静剤としての効用が注目されるようになりました。ヨーロッパでは睡眠を促すハーブとして西洋カノコソウ（バリリアン）が用いられています。

根には特有の強い臭気があり，猫を引き寄せる香りでもあるようです。

山で見られるヤマカノコソウ（ツルカノコソウ）には薬効はなく，薬としては用いられません。現在，カノコソウは北海道や奈良などで薬用に栽培されています。

◆栽培

【日頃の手入れと水やり】

日当たりが良く湿気の多い環境を好みます。鉢植えでは夏場の水切れに注意します。耐寒性に優れています。

【用土】

特に選びませんが，連作は好みません。

【殖やし方】

株分けで殖やします。毎年植え替えることで大株に育てることができます。薬として用いる場合は，秋に地上部が枯れてから掘り上げます。

【病害虫】

特にありません。

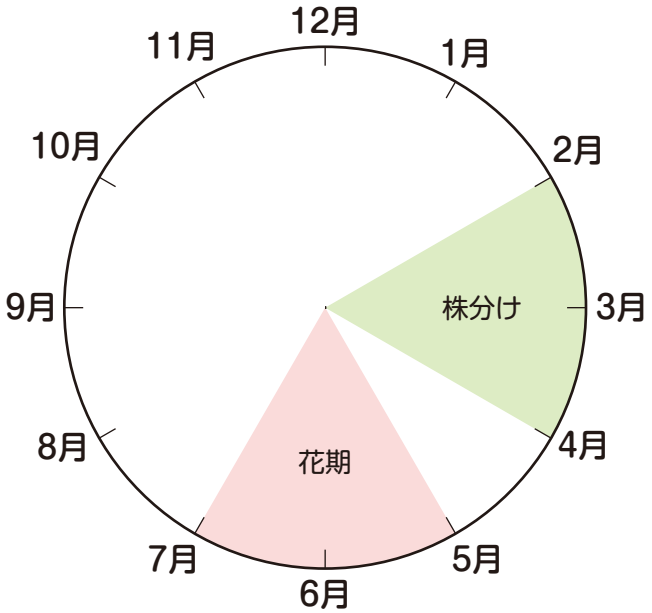
【播種の方法】

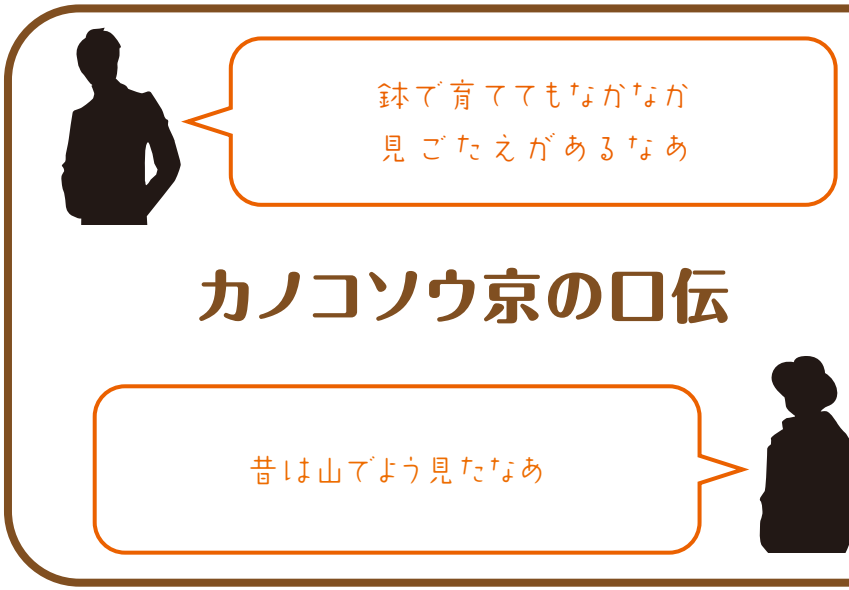
可能ですが，発芽率が低いため株分けが主です。

栽培スケジュール

京都のカノコソウ

現在，京都府RDでは絶滅寸前種で，南部地域においては絶滅した可能性が高いとされています。江戸後期の山本亡羊による『山城採薬目録』（1862）ではハルオミナエシの名で比叡山をはじめ貴船・鞍馬，芦生，岩屋，嵐山，宇治で採薬されていたようです。しかし，約100年後の北村四郎『比叡山ーその自然と人文』（1961）の植物目録にカノコソウは比叡山では絶滅したとあります。





コラム 比叡山フィールドワーク

～江戸時代の採薬ルートを辿り,和歌に詠まれた和の花を観察しました～

江戸後期，公家歌人の千種有功は，京都の医師であった山本亡羊と比叡山へ採薬に出掛けた際に詠んだ50首の和歌を「天台採薬和歌」に残しています。現在では,その頃自生していたエイザンユリは絶滅種,エイザンスミレは絶滅寸前種（京都府RD）と希少な植物となっていますが,比叡山には今でもまだ多くの和の花が生育しています。

このコラムでは,平成30（2018）年5月10日に梅小路公園の園芸セルフケア教室の参加者でフィールドワークを行った様子を紹介します。

※京都の山々を散策するときは,**植物の採取は行わないようご注意ください。**

登山口 ―旧黒谷道― 青龍寺 ―旧黒谷道― 山頂付近 ― 坂　本

登山口はせたし

旧黒谷道

サルトリイバラ

山道の至るところに生えており,斜面が崩れたような所に多い。

エイザンカタバミ

スギの樹林下に群生し,3～4月上旬が花の見頃。

ユキノシタ

千種有功の和歌に「九重の ミやこのふしの 雪のした いくよふりゆく 根さし成らむ」とあり,都の富士といわれる比叡山の雪は何代経っても降り続く,そのユキノシタの根ざしも古く由緒があるのだろう,と詠んでいる。

クリンソウ

山道や山頂付近の谷の下に植えられたかのように生えている。

ショウジョウバカマ

山道に点在して生えている。4月上旬が花の見頃。

ニシキゴロモ

山道沿いにわずかに残っている。

スギ・ヒノキ

スギ・ヒノキの樹林の下には草が全くない状況。

マムシグサ

多くが山道の尾根に向かって咲いていた。4月下旬から5月上旬が花の見頃。

ニガイチゴ

崩れた斜面に多く生じていた。先駆植物の一つ。薄透明の白い花が美しい。

エイザンスミレ

青龍寺の境内の中で育てられている。

青龍寺

参加者の皆さん

山頂付近

カニクサ

滋賀県側の坂本のアスファルトの歩道や石垣の間に生じていた。まちなかでも見られる。

滋賀坂本へ

登山の注意！

平成30（2018）年9月4日及び30日の台風21号,24号では近年まれに見る暴風に見舞われ,京都市内の公園や寺院の古木が多数倒れました。京都トレイルにおいても鞍馬や花脊付近,大原,比叡山,東山と全般にわたって倒木被害があったため,一部通行止めとなりました。近隣の山であっても状況を確認し,準備を整えて登山してください。

写真提供：園芸セルフケア教室

タムラソウ　田村草（キク科　多年草）

- 学名：*Serratula coronata. insularis*
- 分布：本州,四国,九州,朝鮮半島
- 花期：8～10月
- 京都府RD：記載なし
- 環境省RL：記載なし

秋の草花“タムラソウ”

タムラソウは日当たりの良い山地の草原に生える多年草で,草丈は30～140㎝になり,アザミによく似ていますが棘がないのが特徴です。そのため, 取扱いやすさが好まれ, 生け花に使用されたり,庭に植えられたりします。花の茎は長く伸び,上部で2～3本に枝分かれし, 夏の終わりから秋にかけて咲きます。

一方, アザミは春先から初夏,秋にかけて野山に咲きます。花は紅紫色の鮮やかな色合いで, 草原に点々と咲く様子が愛らしいですが,葉には鋭い棘があり, 触れることができません。タムラソウは棘がなく触れることができるため, このもどかしさを解消してくれます。タムラソウとアザミは同じキク科の植物ですが,属は異なり同じ仲間ではありません。

“タマボウキ―玉箒”

タムラソウは別名“タマボウキ”と呼ばれます。“タマボウキ”と呼ばれる植物にはほかにもキク科の低木である“コウヤボウキ”などがあり,コウヤボウキを箒に仕立てたものは神事に使用されます。奈良の正倉院の宝物の中には,コウヤボウキの茎を束ね,ガラス玉を飾った“子日目利箒”（玉箒）が残されています。タムラソウの名の由来は,“玉紫（タマムラサキ）”などが訛ってタムラソウとなったともいわれますが, 定かではありません。タムラソウの若葉は食用になり, 特に岐阜の飛騨地方では“ガンド菜”と呼ばれます。“ガンド”は丸太などを切る際に使われるのこぎりの呼称で,タムラソウの葉がガンドに似ていることからガンド菜と呼ばれるようになったようです。

薬としての利用

享保4（1719）年に江戸の染井の植木屋であった伊藤伊兵衛が著した『廣益地錦抄』には,その頃に栽培された花苗や樹木,薬草について紹介されています。薬草の取扱いについては,「唐和と名付て二品あるも有り和といふ中に二三種あるも有り…」と書かれ, 自生種と中国からの輸入苗を区別して栽培していたことが分かります。また,「薬草は庭圃に植へて四時に心見花實茎葉生出宿根朝夕ながめとなしてしるべし材知文学ありといふ　共草に学ずんハ手さぐりにしてあたるべからす」,「…いづれも花は一景づつありてミるに心をやハらけ気を養の益あり又ハ花葉ながめにたらざる草なりとも薬草なれハ花壇に植えてもいたづらなるまじくや」とあり,薬草は庭園内の花壇で管理し,詳細に観察して性質をよく学んで取り扱うことと記されています。

『廣益地錦抄』には合計191種の薬草が紹介されています。タムラソウはその一つで,薬草として“泥胡菜”の名で記され,「宿根より春生ル初生葉地に敷てあざみに似たり…針もなく毛もなし花の色うすむらさき…花壇に植へし田村草ともいふ」とあります。

【参考文献】伊藤伊兵衛『廣益地錦抄』京都園芸倶楽部,1941

タムラソウの特性

タムラソウは,比較的簡単に種から育てることができます。箱にばらまいて発芽させ,本葉が2〜3枚出たら1株ずつ鉢上げします。

1株で枝分かれして大きな株に育つので,5号鉢以上の植木鉢に鉢上げします。

◆栽培

【日頃の手入れと水やり】

日当たりと風通しの良い場所を好みます。やや乾燥気味に育て,春から秋は1日1回程度の水やりを行いますが,真夏は夕方にもう一度水やりを行います。

【用土】

特に選びませんが,水はけの良い状態を好みます。

【病害虫】

特に心配ありませんが,ハダニが付く場合があります。

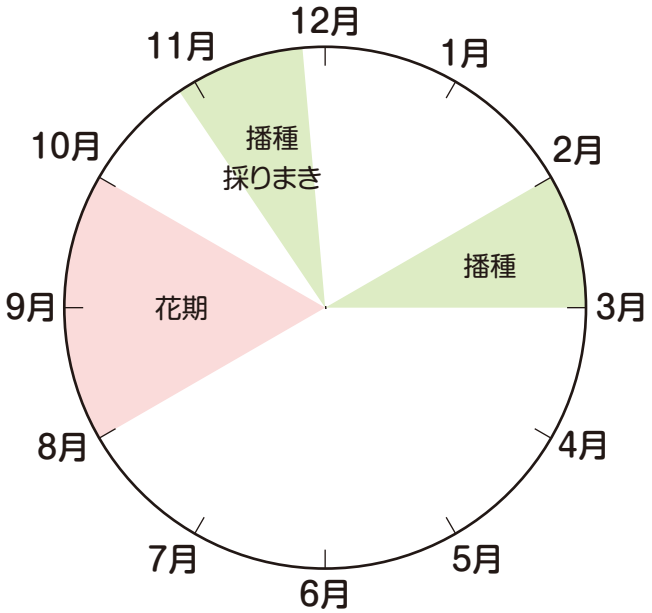
風通しの良い場所に置いて害虫を防ぎます。

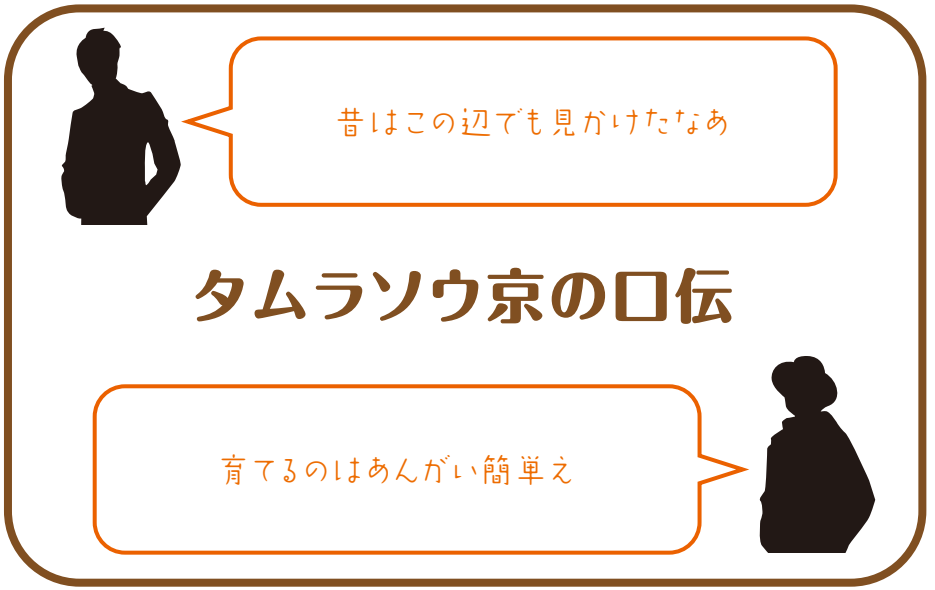
【播種の方法】

種は冠毛を取り除いてから11月に採りまきをするか,封筒などに保存しておいて翌年の2〜3月上旬にまきます。

栽培スケジュール

【絵図】“泥胡菜(でいこさい)”
伊藤伊兵衛『廣益地錦抄』京都園芸倶楽部,1941,国立国会図書館所蔵





コラム

和の花保全ネットワーク ――八坂神社の「をけら詣り」とオケラの魅力

八坂神社の「をけら詣り」で使われるオケラ。「京都市生物多様性プラン」では，京都の文化を支える植物の一つとして紹介されています。このコラムでは，オケラについておさらいし，この植物の魅力を紹介するとともに，再生のための取組をお伝えします。

◎人の暮らしに近い植物　府内では絶滅危惧種

オケラ（学名*Atractylodes japonica*）はキク科の多年草で，漢字では「朮」，「白朮」などと書きます。古くはウケラと呼ばれました。夏季に草丈0.3～1mほどに育ち，冬になると地上部は枯れます。

日本だけでなく中国大陸，朝鮮半島にも分布し，大陸と日本列島が陸続きだった最終氷期の頃の植生の名残と考えられています。

農林業などで野山に適度な人の管理が入ることで長い年月残ってきた植物で，京都でも野山のやや乾いた草地で見られる身近な植物でしたが，京都府レッドデータブック2015では絶滅危惧種に分類されました。

野生のオケラの花（2002年，京都府中丹地方で秦賢二さん写す）

両性花。手前側は雄しべ，右奥は雌しべが出ている。

◎オケラの花の不思議　雌花と両性花

オケラの魅力の一つは，秋に咲く花の美しさです。雌雄異株とされますが，正確には，雌花だけを付ける雌株と，両性花だけを付ける両性株のどちらかしかありません。両性花は，開花当初に雄しべが先に出て，下から雌しべに押し出されるようにして落ちます。

花の色は，多くが純白に近い白色ですが，雌しべの葯筒（やくとう）が赤みを帯びることがあります。また，両性花は雄しべの葯筒が青～紫色のため，開花当初だけは青みを帯びて見えることがあり，花の色合いの対比や変化を見ることができます。

◎オケラと生薬「ビャクジュツ」

根茎を掘り上げて乾燥させたものは生薬「ビャクジュツ（白朮）」になります。健胃，利尿，止瀉（ししゃ）などを目的とする薬に配合され，正月のお屠蘇（とそ）にも入っています。また，焚くと殺虫，殺菌の効果があり，蔵の呉服，和本のカビや虫を防ぐのに使われるなど生活の必需品であり，また，厄除けの力があると信じられてきました。

ビャクジュツとなるオケラの根茎
（写真提供：武田薬品京都薬用植物園）

大晦日から元旦にかけての八坂神社「をけら詣り（白朮祭）」は，少なくとも江戸中期に遡る伝統の行事で，ビャクジュツが灯籠で焚かれ，1年の無病息災を祈ります。

をけら詣りで灯籠の「をけら火」から吉兆縄に火を移す人々（2017年大晦日）

霧ふかきうけらが花に入りみだれ
　くすりがり（薬狩り）する武蔵野の原
――江戸の歌人・橘千景（1735～1808）
　の歌集『うけらが花』より――

◎オケラ保全の取組の芽生え

八坂神社本殿には，40年近くも生育する長寿のオケラ（雌株）が1株だけありました。少しずつ勢いが失われていたため，緑化協会が相談を受けて養生に協力。別の両性株を近くに置いたところ，平成28（2016）年秋に種子を付け，実生苗（みしょう）ができました。

地元東山区に本部を置くNPO法人国境なき環境協働ネットワーク（内海貴夫理事長）が，このオケラを殖やし，将来的に祭事にいかしてもらいたいと，地域を代表する団体に呼び掛けて，平成29（2017）年，再生プログラムをスタートしました（「京の生きもの・文化協働再生プロジェクト認定制度」第17号認定）。

八坂神社本殿オケラの実生苗。葉はいずれも本葉（2017年4月）

◎地域の小中学生とともに

将来を担う子どもたちに地域の伝統文化やオケラについて知ってほしいと，市立開睛小中学校（通称・東山開睛館）の児童・生徒に育ててもらうことになりました。平成30（2018）年11月1日，「環境委員会」の4～9年生に実生株30株を託し，子どもたちは，小さなオケラの根茎を確かめながら，プランター10基に植え付けました。

根茎が大きくなるには何年も掛かることから，同ネットワークや同校では，学年にまたがる長い取組とし，栽培を通じて，地域の歴史文化，人と自然の関係などを学んでいってほしいと考えています。

オケラ実生株を託され，大事に育てることを誓う児童・生徒たち